祝　辞

祝辞

京都府知事
西脇　隆俊

京都府立医科大学が、大学昇格100周年という記念すべき節目の年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

府立医科大学は、西洋医学の導入を願う京都府民の寄付により、明治５年に京都東山の青蓮院の境内に開設された療病院で、診療と医師の育成が始まったことに由来し、明治36年に京都府立医学専門学校を設立され、大正10年に大学に昇格されました。以来、今日に至るまで「世界トップレベルの医学を地域へ」という理念のもとで、地域の医療を守る拠点として優れた人材を輩出するとともに、世界最先端の研究成果を地域に還元されてきました。近年においても、最先端がん治療研究施設の開設や保健看護学研究科後期課程の設置など、教育研究の環境を整備されるとともに、新たなカリキュラムの導入や地域実習の拡充など、教育内容の一層の充実を図られたところです。

こうした取組により、府民の命と健康を守る医療人材の輩出に多大な貢献をいただきましたことに対し、厚くお礼申し上げますとともに、竹中学長をはじめ歴代学長、関係の皆様の御尽力に対し、深く敬意を表します。

また、府立医科大学は、依然として感染拡大が続く新型コロナウイルス感染症への対策において、府内で唯一の第一種感染症指定医療機関として、重症患者への医療提供体制を構築いただくとともに、新型コロナウイルス感染症に関する研究成果を多数発表されるなど、研究機関としても重要な役割を果たしていただいておりますことに、心から感謝申し上げます。

京都府といたしましても、新型コロナウイルス感染症対策を含め、府民が安心できる健康・医療の充実に向けて、引き続き全力で取り組んでまいりたいと考えておりますので、府立医科大学におかれましても、京都府そして我が国の医学、医療の振興に一層の御協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに当たり、府立医科大学が、我が国における医学・医療の最先端拠点のひとつとして、大学昇格100周年を契機に、今後もますます発展されますことを心から祈念して、私のお祝いの言葉とさせていただきます。

京都府立医科大学
学長　竹中　洋

京都府立医科大学は2021年11月に大学昇格100年を迎えました。
さて、大学令の意味をここで少し整理しておきたいと思いますので、文部科学省の学制百年史編集委員会資料を紹介したいと思います。大正7(1918年)年12月に定められた大学令は、そもそも存在した帝国大学のみを規程するものでしたが、大正8年に帝国大学に関しては別に「帝国大学令」を改定・公布し、同年3月に大学令（大学規程）を定めました。もう少し詳しくは、特別の必要のある場合には一個の学部を置くことができるとして、単科大学の成立も認めています。また、学部には研究科を設置することとし、数個の学部を置く大学では研究科間の連絡・協調のために、これを総合して大学院を設置する制度とし、研究科および大学院は学部と密接に結びついたものとなっています。加えて、官立のほか公立および私立の大学をも認めることとしました。公立の大学に関しては元来わが国における学校経営と、国家および地方自治体との関係において、地方自治体をして専門教育を経営させるのは例外であり、公立大学を認めるのも例外中の例外であるから、大学令においては特別の必要ある場合に上級自治体たる北海道および府県に限りこれを許すこととしています。大正10年（1921年）に京都府立医科大学が誕生することになります。

本学の100年前の申請時の苦労に思いを馳せれば、現代の本学の課題も見えてくるように思います。1つは、例外が2つ重なった産みの苦しみです。単科医科大学であることの意味、現在も看護学科を併置したものの単科大学として設備投資や大学機能の維持についてこの際、注意深く改めて自覚すべきと思います。加えて、当時公立大学であった単科医科大学の多くが国立総合大学に展開した中で、公立であり続けたことです。この歴史認識の原点に立って次の100年に希望を託すことが必要です。私は百年前に述べられている大学院の充実とその成果の社会還元並びに高度な医療の推進が、双輪となって本学の未来を明るくするものと信じています。

一方、大正7年から世界の医学会を震撼とさせたのは第一次世界大戦と共に世界中に拡大したスペイン風邪です。第1回流行は1918年8月から翌年7月、第2回は10月から翌1920年の7月、第3回は8月から21年7月で総死亡者数は約38万人と報告されています（内閣官房新型インフルエンザ対策等過去のパンデミック）。正に今日のCOVID-19流行に重なってきます。附属病院は第一種感染症指定病院として、京都府の感染対策に可能な限りの協力をしています。看護師を始め多くの医療従事者のご尽力に感謝いたします。また、2年間正常でない状態におかれた学生諸君は、この機会に「大学で学ぶ」ことを考えていただきたいと思います。Withから見えるPostはコロナ以前と全く変わる仕組みになろうかと思います。今が、次の百年への出発点になるはずです。

本学に関わっている全ての人たちと　先人に感謝し明日の本学を託す若人と夢を共有したいと考えています。

祝辞

京都府公立大学法人
理事長　金田　章裕

京都府立医科大学が大学昇格100周年を迎えられたことを心からお祝い申し上げます。

大学令の公布を受け、多くの方の御尽力により、大正10年(1921年)に京都府立医学専門学校から京都府立医科大学に昇格されましたが、戦前戦後の社会の変化の中、医療の提供と医師養成という使命を果たすべく、歴代の教授の先生を中心に、関係の皆様が営々と教育と研究、診療に心血を注いでこられました。多くの優秀な教員や医師を輩出され、地域医療・医学の発展、府民の医療等に多大な貢献と御尽力されておりますことに、深く感謝と敬意を表します。

京都府立医科大学の長い歴史の中でも、平成20年(2008年)に京都府公立大学法人が運営する大学となりましたことは、ひとつの変化でありましたが、「世界トップレベルの医学を地域に」の理念は変わることがなく、高度な教育・研究の推進はもちろんのこと、府民に最高水準の医療を提供するとともに、府内の関係病院に医師を派遣いただくなど、京都府の地域医療並びに府民の健康と安心に寄与してこられたところです。

私たちは今、新型コロナウイルスの感染拡大という未曽有の危機的状況に直面しています。とりわけ附属病院及び北部医療センターにおかれましては、感染の危険を伴う非常に困難な職務に、強い使命感と責任感を持って、日夜携わっていただいており、あらためて感謝申し上げます。

また、大学の教育・研究においても、オンライン授業などによる学生の学びの確保、学生間の感染拡大予防に工夫を凝らしていただいておりますが、こうした感染症との戦いの中にあってはなおのこと、人々の豊かな生活の実現と我が国の発展のため、人材育成と科学技術の振興、知的創造活動の中核としての役割が大学に求められているところです。

私自身は、荒巻禎一元理事長、長尾真前理事長の後を受け、平成30年6月から京都府公立大学法人理事長として、法人・大学運営に携わっております。コロナ禍の先行き不透明な状況の中ではありますが、京都府立医科大学が地域に貢献する未来志向の大学としてさらなる発展ができるよう、教職員や学生の声にも耳を傾けながら、竹中学長とともに努めてまいります。

末筆になりましたが、京都府立医科大学は、令和４年（2022年）に創立150周年の記念すべき節目の年を迎えられます。今後のますますの御発展を心からお祈りいたします。

一般社団法人公立大学協会　会長
北九州市立大学長　松尾　太加志

「京都府立医科大学」に昇格され100年という節目の年を迎えられましたことに心からお喜び申し上げます。お贈りする言葉としては「おめでとうございます」よりも「ありがとうございます」のほうがふさわしいでしょう。100年に渡り、医科大学として教育・研究及び診療活動にご尽力をいただきましたことへのお礼の言葉です、多くの医療人を輩出し、世界トップレベルの研究成果をあげられ、そして地域住民の診療に携わられてこられたことは、日本の医療のために多大なる貢献をいただいたことであり、そのご貢献には感謝の言葉しかかありません。

現在、公立大学は全国で98校あります。その中で看護や歯科を含めた医療系の学部を有する医療系の大学が4割強もあります。それだけ公立大学は地元の地域医療に貢献をしております。その多くは戦前の医科の専門学校が戦後新制大学として昇格したもの、平成以降に看護系の公立短期大学が大学に昇格するなど看護系の学部を持つ公立大学が多く設置されたことによるものです。

しかし、京都府立医科大学は、戦前の旧制大学として、1921年に専門学校から京都府立医科大学に昇格された大学であり、公立大学の医科系大学の中ではルーツ的な存在であります。さらに、現存する全公立大学の中で大学としての設立が最も古い大学でもあります。そういった意味では、公立大学の歴史は京都府立医科大学から始まったと言っても過言ではないでしょう。

戦前にルーツを持つ公立大学の多くは、戦後に国立大学に統合されてきた歴史があります。京都府立医科大学だけは、公立の大学のまま100年の歴史を刻まれてこられたわけです。しかも、大学の名称も100年前と変わらぬことは、歴史と伝統のある大学として一貫して地域医療に貢献をされてきた証でもあります。それは、多くの卒業生、教職員にとって誇りとなることだと拝察いたします。

公立大学には、国立大学や私立大学にはない強みがあります。地元の学生を多く受け入れ優秀な人材を輩出しています。京都府立医科大学におかれましても、医学や看護を志す優秀な学生の受け皿として長きにわたり貢献をいただいています。そして、医療人を世に送り出し、地域医療を支えるという公立大学の理念に合致した教育・研究・地域貢献を実践してきておられます。この姿勢はどれだけ時を経たとしても変わらぬことでしょう。

この100年という節目以降も、大学としてますます発展され、医療における教育・研究並びに診療活動にいっそうのご貢献をいただきますことを祈念して、挨拶の言葉とさせていただきます。

祝辞

東京慈恵会医科大学
学長　松藤　千弥

京都府立医科大学と深い絆を持つ東京慈恵会医科大学を代表して、貴学の大学昇格100周年を心よりお祝い申しあげます。

両大学を切っても切れない関係にしているのは、学生運動部同士の交流、いわゆる「府立医大・慈恵医大対抗戦」です。昭和9年（1934年）に始まり、ときに中断しながらも今日まで続いてきたこの対抗戦は、現役部員にとって最も負けられない試合であり、1年ぶりの再会を祝う宴とともに、多くの同窓の青春の思い出です。部員同士の交流は卒業後も続き、その結果、大学同士も教育、研究、人的交流面にわたって深い協力関係を築き上げています。残念ながら、2019年の第60回の後、感染症の影響により対抗戦は中断されており、早い再開が待ち望まれます。

この対抗戦は、予科ぐるみの対戦相手を探していた両大学の学生達が呼応して始まりました。相手選びの決め手となったのは、両校の歴史、特に大学昇格の経緯の共通点でした。大正7年（1918年）の大学令公布後直ちに昇格が叶ったのではなく、府立は京都大学医学部が隣接したため、慈恵は初めての私立単科大学であったために、十分な準備が必要とされ、同窓や支援者の力も借りて実現したのでした。大正10年（1921年）10月20日の官報に、同年10月19日付の両大学昇格の告示が並んで掲載されています。

両大学の縁は、さらに明治維新前夜に遡ります。慶応4年（1868年）、京都相国寺内養源院に招かれて、鳥羽・伏見の戦における戦傷者の治療にあたった英医ウイリアム・ウイリスによって、西洋医学の先進性が国内に知れ渡りました。明石博高もウイリスの活躍を目の当たりにした一人だと言われています。彼はすぐさま西洋式の病院を京都に設置することを提案し、明治5年（1872年）の療病院設立に中心的役割を果たしました。一方ウイリスは、東京医学校兼大病院の院長を短期間務めた後、鹿児島医学校で教鞭をとりました。そこでのウイリスの一番弟子が、慈恵医大の創設者、高木兼寛でした。高木はウイリスから英国式の医学を学び、さらにロンドンに留学する機会を得て、帰国後の明治14年（1881年）、英国医学を範とする成医会講習所を創設、慈恵医大となってからもその伝統が守られています。

大学に昇格するというのは、その使命に教育だけでなく研究が加わること、その能力があると認められたことを意味します。両大学が他の多くに先駆けて昇格を成し遂げたのは、医療と医療人育成にとどまらず、患者・地域に届ける医学を常に進歩させていたからだと言えるでしょう。本邦医学部の中で独自の伝統を持つ両大学が、教育、研究、診療の各分野において輝きを増し、自ら定めた役割を果たすために、学生時代から育む強い絆に基づいた大学間の交流は重要であり続けると思います。貴学のますますのご発展と、交流の深化を祈念して、お祝いのごあいさつといたします。

京都府立医科大学学友会
会長　井端　泰彦
（京都府立医科大学名誉教授、元学長）

母校府立医大は明治5年（1872年）粟田口青蓮院において療病院として開学し、来年で創立150周年を迎えます。本学開学当時は、神田お玉ケ池の種痘所を起源とする東大医学部、適塾を由来とする阪大医学部等医学教育機関が勃興する近代医学の黎明期でもありました。その中において本学は全国屈指の伝統を誇り、今日まで医学、医療の現場で活動して参りました。そして本学創立に際しては、京都の町衆、商店、花柳界などの多岐に渡る支援があったことも特筆すべきことです。また、西欧よりドクター・ヨンケル、ドクター・ショイベを招聘し西洋医学を積極的に取り入れました。ドクター・ヨンケルは麻酔器を創造し、維新の役にでは多くの人々の生命を救ったことで知られています。

明治32年（1899年）には京都大学医学部の設立の動きがあり、多くの教員が本学から異動し、府立医大は存亡の危機に瀕しました。その時にあって第5代学長の島村俊一は毅然とした態度で大学を運営し、今日の地歩を築いたことは重要な点と考えられます。

その後本学は大正10年（1921年）に大学令により、京都府立医科大学となりました。

私は今話題に成っております日本学術会議第19期会員（医、歯、薬学）を平成15年（2003年）7月より平成17年（2005年）10月まで務めました。私の任期中には我が国の在り方、今後の変遷について濃密な議論が行われ、私も在り方委員会の委員としてしばしば東京に足を運びました。

此の時期、全ての国立大学の法人化が行われ、私立大学は元々法人でありましたので、公立大学についても法人化の取り組みが種々議論されました。其の中には平成14年1月に府立の大学のあり方懇話会が設置されました。公立大学の法人化については、公立法人の定款案が作成されるまでの経緯については、京都工芸繊維大学、京都府立大学と本学から委員が選出され、いろいろの協議が行われましたが、その経緯については髙松哲郎教授（現名誉教授）に尽力いただきました。

府立の大学のあり方懇話会は井村裕夫前京都大学総長を座長とし、京都府の産学公から選ばれた13名の委員から成り、京都府立大学井口学長、府立医大学長として私も含まれております。懇話会では府立の大学の基本的なあり方、教育研究のあり方、大学の組織・運営などについて濃密な議論がかわされました。懇話会の議論について両大学で種々検討がなされましたが、両大学が合同し一大学と成るのではなく、それぞれ京都府立大学、京都府立医科大学として存続することが決定いたしました。

私は平成13年（2001年）から6年間本学の学長を務めましたが、学長を目指して考えた事は、アカデミズムを浸透させること、働きがいのある職場にする事、スターを育てること、合理化、機構の改革、進取の気性に富む大学院生、研究者を育てること、京都府と太いパイプを築くことなどであります。但し歴史と伝統の上にあぐらをかくようなものでは発展は望めない、長期展望を視野に入れた現実的な整備を行う等でありました。また学長は全責任を負うにしろ権限については特別なものを除き管理職や委員会に移譲し、出来るだけスリムになり、その分対外的な対応に振り向けるなどであります。

今後、大学昇格１００周年、来年の大学創立１５０周年を記念として、医学教育、研究、診療をバランス良く展開し、京都府民の方々の健康を守り、新しく発展することを祈念し、医学に大きく貢献することを期待しています。

祝辞

京都府立医科大学医学部看護学科同窓会
中川　雅子

このたびは、京都府立医科大学が医学専門学校から大学に昇格して100周年を迎えられましたことに、こころよりお喜び申しあげます。

明治五年の療病院建設以降、長い医学教育の歴史をもつ京都府立医科大学は、2022年に創立150周年を迎えられます。その中でも医学専門学校から大学に昇格しての100年間は、高度な医学教育と研究・医療の提供機関として優れた医師を育ててこられました。また医療技術のめざましい発展に貢献され、京都府の医療のみならず、日本の高度な医療の発展に大きく貢献されたと拝察致しております。

また京都府立医科大学は、早い段階から看護師、助産師教育の教育機関を付置され、優秀な看護職を送り出したと伺います。末席ながら私も附属看護学院の時代に本学に学び、附属病院において看護職としてのスタートをきりました。その後、看護コースの大学化が全国的に進むに従って、看護に関する種々の研究が増えました。学生時代に学んだ事柄は、もう今のものとは別物と感じるほど、医学も看護学も発展しています。そして本学の看護教育のコースにおいても、京都府立医科大学の教師陣のバックアップのもとに、より質の高い教育をめざして、看護学科、保健看護学研究科を設置するに至っています。

昨年来の新型コロナウィルス感染症（COVID-19）によるパンデミックでは世界中の医療職が危機的な状況の中で日夜格闘し、日本も例に漏れず、第５波の中で苦戦を強いられています。そして全ての人が効果的な感染予防法や治療法が確立されることを待ち望んでいます。このような状況下では、医学系大学や関連する研究機関における確かな予防法の確立、新薬・新治療法開発に関する取り組みが非常に重要です。

看護職の立場からも、大学昇格への歩みは、その分野の発展に大きくつながることを、遅ればせながら実感して参りました。この記念誌から、京都府立医科大学の大学昇格当時の様子やその意味するところを楽しみに読ませていただきたいと思います。

京都府立医科大学　附属病院長
大学創立150周年記念事業・式典実行委員長　夜 久　均

1918年（大正7年）12月6日、国公立医学専門学校にとって待望の大学令が発布された。これによって京都・大阪・愛知・熊本の4公立医学専門学校のうち、1919年（大正8年）には大阪、翌年には愛知が医科大学に昇格、我が京都府立医学専門学校は1921年（大正10年）10月19日に大学令に基づき大学昇格を認められた。それまでは総合制の帝国大学だけが大学として認められており、従って医師の養成にも大学と専門学校の違いがあり、おそらく京都帝国大学と京都府立医学専門学校の間には大きな壁があったに違いない。もっとも我が大学は1872年（明治5年）粟田口青蓮院に仮療病院として創立され、京都帝国大学京都医科大学が1899年（明治32年）に設立された時にはほとんどの医学士教諭が（2人だけを残して）当大学から京都大学に移った経緯がある。

我が大学の大学昇格には先人の並々ならぬ熱意、努力、行動があったと記されている。当時の生徒や校友（2500人）らの後押しもあり、当時の小川瑳五郎校長は1919年（大正8年）京都府立医学専門学校昇格期成同盟会を組織し、文部省及び京都府の了解を得るため奔走した。また昇格に伴う資金の調達のために校友からの寄付を募り、ほとんどの校友から寄付を得たことから京都府もその熱意を認め賛意を示し、起債を認可の上、校舎・病院の整備、花園分院・予科の建設を計画して1921年（大正10年）の大学昇格に至ったとされる。

我が大学の大学昇格への過程で、このような並々ならぬ先人の動きが、昇格の3年ほど前から起こっているが、くしくも時期を同じくして1918年（大正7年）はスペイン風邪の国内流行が始まった年にあたり、それは波を繰り返しながら3年間続いた。京都府でも41万人が感染し、1万1千人が亡くなったとされる。現在（2021年8月15日）、我々は新型コロナウイルス感染第5波の真っ只中におり、まだピークが見えていないが既に医療崩壊が叫ばれている。しかし京都府における感染者数は2万2千人、死亡は250人である。この数の違いだけを見ても当時は想像できない惨状だったと思われる。当時小川校長が病院長も兼ねていたようであるが、「天職を全うせねばならない。人命救助を通り越して人道戦である」と職員を激励し患者を受け入れていたという記録が残っている。スペイン風邪対応と大学昇格運動を同じ時期にされた小川校長・病院長のご苦労は想像を通り越している。

我が京都府立医科大学は2022年に創立150周年を迎え、それに先立ち2021年に大学昇格100周年を迎えることになるが、大学の歴史の非常に大きな節目が今年、来年に迎えることの重みをひしひしと感じている。このような大きな節目を次に迎えるのは50年後になる。このような大学の歴史の節目に大学の現役の教員でいることに運命的なものを感じると共に、また非常に光栄な事だと改めて実感する。このような機会に、創立以来幾度となく訪れた本学存続の危機を、先人達が並々ならぬ熱意・努力・実行力で乗り切られた歴史を再確認し、我々はさらに新しい道を大学のために切り開いていかなければならない。何とかこの現代の未曽有のコロナ禍を乗り切り、現在進みつつある大きな大学将来整備構想の中で、50年後の大学・附属病院のあり方を全大学で熟考し、歴史あるこの大学をさらなるステージに押し上げるべく尽力していくことを誓う次第である。

祝辞

京都府立医科大学　分子生化学教授
大学昇格100周年記念事業準備・実行委員会委員長　奥田　司

本学は1872年（明治5年）に設立された京都府療病院をその源流とし、その後途切れることなくこの地で医育機関として活動を続けてきました。来年2022年は創立150周年となるのですが、その前年である本年2021年はもう一つの節目である大学昇格100周年の記念すべき年にあたります。本学は医育機関としても、そして大学としても古くからの組織ということになるのですが、この期間、決して安寧な道のりだったのではなく、数々の困難を乗り越えてきています。なかでも1921年に果たした大学昇格は、本学の歩みの中でも最も困難であり かつ後世への影響が最も大きなイベントだったと言えるでしょう。

大正初期の我が国の医学教育は三層構造となっていました。すなわち大学教育を受けて医師になるもの、医学専門学校卒業者で医術開業試験を免除される者、そして各種学校卒業者で医術開業試験を受けて合格した者の、三とおりの医育教育の仕組みがありました。もちろんこれでうまくゆくわけはなく、「医育一元化」が叫ばれ、医学教育は大学に一本化されることとなりました。したがって、当時 旧制医学専門学校であった本学は大学に昇格する以外に生き残る道が閉ざされたことになります。本学はいち早く大学昇格を目指し、大学構成員や交友・学生が活動を開始したのですが、重要なのは自治体や地域の方がこれを支持するかどうかということになります。当時の文献から、幸いなことに自治体や地域の方々のご理解とご協力と支持を得たことによって、文部省から求められたいくつかの厳しい条件を克服することができ、大きな困難を乗り越えて、大学昇格を果たすことができたと認識しています。

印象深いのは、昇格運動の旗振り役であった当時の小川瑳五郎校長が、昇格の喜びだけではなく、「大学としての使命」に身の引締まる思いでいたことを記録に残していることです。それは、より高度な医療の提供であり、継続する医療人の輩出であり、そして何より高いレベルの研究能力への到達でした。くわえて時代や地域の要請に応えることのできる医育機関でありつづけること、も重要でした。それは当時の学友たちにも共有されていたはずです。

実際、本学は大学昇格以降、総合医育機関であることに加え、様々な時代の要請に応えてきています。大学昇格はスペイン風邪の大流行が収まりきらない時代でした。戦前は赤痢や腸チフスといった「水系感染症」への対応や、多数の死傷者を出す「交通災害」にも対応しました。戦中には結核や食糧・栄養問題への対応が求められました。その後現在に至るまで、個々には挙げませんが、地域で生じる様々な健康課題に対応してきています。耳目に新しいところでは2019年に勃興した新型コロナウイルス感染症に対し、第一種感染症指定医療機関として最前線に立って対応していることを挙げることが出来るでしょう。

医育機関としては、これまで弛まず総計11000名を超える医師と総計10000名を超える看護師を育て、研究機関としては6000件を超える多彩な分野の博士論文を発信し、医学研究者や医育教育者を輩出しました。多職種連携のもと地域医療を実地学修させる本学独自の医学部プログラムを持つことも特筆したいと思います。

このようなかたちで地域医療や医学研究への貢献を継続することができているのは、紛れもなく「大学昇格」を果たしたことがその原点であり、当時の昇格運動も含め、これまで本学を支えてくださった多くの方々への感謝を私たちは決して忘れてはならないと考えます。

さて、本学は大学として次の100年間の第一歩を踏み出しました。大学昇格100周年の記念の年に当たって、私たちは大学昇格時の先人たちの思いや決意や使命感に今一度立ち返るべきと考えます。大学昇格100周年記念事業委員会が取り組んできた関連イベントやこの小冊子の発刊が その一助となることを期待します。

京都府立医科大学　医学部看護学科
学科長　吾妻　知美

京都府立医科大学 大学昇格100周年を迎えられたことを、心よりお喜び申し上げます。1921（大正10）年、大学令が制定され京都府立医科大学が設置された当時、医師は上流医、中流医、下流医に分類され、医学博士、医学士は上流医に位置づけられていたそうです[1)]。また、この頃から医師に対して“先生”という呼称が一般的になったとも言われています[2)]。本学は権威ある医学教育の先駆けとして、1世紀にわたり国内外に多くの優秀な医師を排出され、トップレベルの医学・先進的研究を世界に発信してこられました。これもひとえに、卒業生並びにご関係の方々のたゆまぬ努力の賜物とここに敬意を表します。あわせて、看護学科はこれまで大変多くの先生方にご支援を頂いてまいりましたこと、深く御礼申し上げます。

私の所属する看護学科は1889（明治22）年に開設した附属産婆教習所を礎に、京都府立医科大学附属看護専門学校、医療技術短期大学部を経て、2002（平成14）年に京都府で初めての看護系大学（医学部看護学科）として医学部に開設されました。看護学生は、医学科の諸先生による最新の医学、医療の基礎を教授していただいております。さらに、附属病院を中心とした臨床実習においても、最先端の高度な医療、多職種連携の実際を学ばせていただくことで、高度な知識と高い実践能力を身につけた看護職者を輩出することで、地域社会における看護の質の向上に寄与させていただいております。

また、2007（平成19）年には京都府内で初めての看護系大学院である保健看護学研究科を、2018（平成30）年には、長年の祈願であった博士後期課程を開設しました。保健看護学研究科においても、医学科の先生方に多大なご協力をいただきながら、看護学の発展に寄与する高度実践看護師の教育を歩みはじめることができました。

医学部の歴史を守り、さらに強固なものへと発展させていけるよう、看護学科一同力を尽くしたいと思っております。今後とも変わらぬご指導、ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

引用文献

1）亀山美知子（1984）近代日本看護史　Ⅳ看護婦と医師、ドメス出版、p.256.
2）前掲書1）. p.258

京都府立医科大学 昇格100周年を、心からお祝い申し上げます。

本校学生からのメッセージ

大学昇格100周年記念に寄せて　ご祝辞

医学科6年生学年代表　井上 史嵐

この度は大学昇格100周年誠におめでとうございます。1921年に医科大学への昇格を認可されてからこの2021年でちょうど1世紀とのことですが、100年間という途方もない時間が経過したという事実にまず圧倒されます。また、来年の2022年には大学の創立150周年というもう一つの大きな節目をも迎えるということで、このような深い歴史を持った京都府立医科大学で勉学に励むことができ、記念すべき瞬間に立ち会うことができたことを深く感謝しています。

私は、「将来臨床研究がしたい」という思いで本学への入学を選択しました。入学後すぐに、基礎医学のイロハも教わっていない段階であるにも関わらず、教養課程において2学年に向けた非常に高度な実習が用意されるなど、本学の教育レベルの高さに驚かされたことを今でも覚えています。思えばそれは、長く続いてきた単科医科大学であるからこその洗練された医学準備教育だったのだと、今にして理解できます。その後も、篤志ご献体を解剖させて頂き、生理学や生化学、病理学など様々な基礎医学科目を履修し、臨床医学、社会医学とわたって幅広い基礎的な知識を習得することができました。4年生の冬からは臨床医学の実習に挑むことになりましたが、実習をさせて頂いたどの診療科においてもハイレベルな医療教育を受けることができた実感があります。入学前から、京都府立医科大学は、京都府下での地域実習に力を入れていると聞いていましたが、評判通り6回生のクリニカルクラークシップにおいては附属病院で高度な医療に触れさせて頂くとともに、実際に府下の関係病院で現場に参加させて頂くことによって、臨床研究の在り方についての洞察を深めるとともに、地域における実臨床の現状の詳細を学ぶことができたように思います。

このように充実した6年間を私が過ごすことができたのは、ひとえに京都府立医科大学の大学としてのシステム自体を、長年育て上げられたこれまでの数多くの先輩方の努力によるものだと考えています。私はただ医学生として過ごしただけですが、それだけでも、先達の先生方の歴史を、そして多くの関係病院との連携を実感することができました。

私は来年2022年の3月で本学を卒業し医療人の仲間入りを果たすことになります。その際には、本学の「世界トップレベルの医学を地域へ」を実践すべく、様々な知識を身につけ、実践的な技術を修得し、患者さん第一の精神を涵養して、本学にふさわしい医師へと成長したいと考えています。そして、今はまだ将来のことはわかりませんが、いつか少しでも母校がますます発展するお手伝いができればと思っております。

このような学びを得る機会、環境を作り上げて来られた先達の先生方へ深く感謝申し上げます。現在、京都府だけでなく日本全体の医療体制がコロナ禍に対する試練に挑んでいる状況となっていますが、京都府立医科大学がその禍に光明をもたらす先駆となって、次の200周年に向けた力強いスタートダッシュを切り、本学が益々発展するよう心の底から祈っております。

大学昇格100周年に寄せて

京都府立医科大学医学部看護学科4年　森 惠美

大学昇格100周年おめでとうございます。

私は、永い歴史と伝統を持つ我が校に入学し、医療と看護の礎を学べていることを本当に嬉しく、また誇りに思います。そしてこの大学での4年間を通し、非常に多くのことを学び、感じ、身につけることが出来ていると実感しています。毎日の講義や演習、臨地実習を経て、看護に必要な知識、技術、思考を深めることが出来ました。また学業だけでなく学校生活や部活動を通し、友人や先輩、後輩の方々との出会いや交流が大きな刺激となり、患者の思いに寄り添う感受性や人間性、多職種と協働していくための協調性など、人としてまた医療者としての心を成長させてくれたと感じています。

昨年より思いがけずCOVID-19が流行し、医療の需要が増す一方で、大学の学習環境も大きな影響を受けました。私も看護師として働き始める時に、十分なレベルに達していることが出来るのかとても不安になりました。しかしこのような状況の中でも実習を受けいれてくださった患者様、看護師の方々や病院関係者の皆様に深く感謝しています。附属病院での実習調整やオンラインでの工夫をしながら学習環境を整えてくれた先生方、学校関係者の皆様の支援のもと貴重な学びを得ることが出来ました。この間の学びや経験を通して、医療や看護の役割を再認識し、学習環境の重要性が理解できたと思います。その上で、患者の命を預かる仕事であるからこそ、私たちは患者の侵襲や苦痛を最小限にし、患者に不安を与えないための看護技術の習得が重要であると考えます。学内での実践的な技術を磨くことが出来る時間・場所・シミュレーター等の環境のさらなる整備・充実を望みます。

来年の春より私も臨床で働き始めます。最初は出来ないことのほうが多く、無力感を感じることもあるかもしれません。しかし、伝統ある本学で学べたことを誇りに、本学で培ってきた基礎・技量を発揮し、患者に貢献すると共に看護師としての能力・キャリアを高めていきたいと考えています。

最後になりましたが、京都府立医科大学の益々のご発展を祈念いたしましてお祝いの言葉といたします。